

令和4(2022)年度

教養ゼミ（初年次教育科目）

実施状況報告書



福山大学

FUKUYAMA UNIVERSITY

..... 【 目 次 】

経済学部 経済学科	1
経済学部 国際経済学科	3
経済学部 税務会計学科	4
人間文化学部 人間文化学科	5
人間文化学部 心理学科	7
人間文化学部 メディア・映像学科	9
工学部 スマートシステム学科	10
工学部 建築学科	11
工学部 情報工学科	12
工学部 機械システム工学科	13
生命工学部 生物工学科	16
生命工学部 生命栄養科学科	18
生命工学部 海洋生物科学科	20
薬学部	22

経済学部 経済学科

■ 担当者氏名

(代表) 田中 征史

吉田 卓史、三川 敦、石丸 敬二、李 森、早川 達二、中村 和裕、藤本 倫史、
野田 光太郎、北浦 孝、佐藤 彰三、櫻木 規美子、楠田 昭二、村松 悠次、高羅 ひとみ

■ ゼミ数, ゼミの学生数

令和4年度新入生175名と再履修生2名の計177名を、学生番号順に15クラス+再履修1クラスの計16クラスに分割した。1クラスあたりの学生数は約12名であった。

■ 実施内容

令和3年度に引き続き、授業をクラス担任別で実施する授業回ではレベル1・2ともに対面授業を行い、受講生全体で受講する授業回ではレベル1・2ともに遠隔授業で実施した。対面授業の割合が全授業回の約1/3と担任学生と接する機会が少ないことから、クラス担任が定期的に学生と面談等を行う機会も確保した。遠隔授業回は主にビジネス能力検定3級(前期)と2級(後期)の対策講座をそれぞれ8回ずつオンデマンドで実施した。オンデマンド教材により繰り返し学習することができ、また、理解度チェックのための小テストを課題として出すことにより、資格試験に向けて継続して学習させる環境を提供した。

【クラス担任別の対面授業の実施内容】

- ・大学4年間の行動計画の作成・プレゼン発表(2回)
- ・グループワーク(4回)
- ・学習指導+個別面談(5回)

【受講生全体での遠隔授業の実施内容】

- ・ビジネス能力検定対策講座(16回)
- ・レポートの書き方講座(3回)

■ 教養ゼミの特徴

初年次教育として「教養ゼミ」は、高校から大学への学習環境をスムーズに移行するための学習スキルを身につけて学習意欲の向上にも効果をあげている。円滑な大学生活を送るために必要な知識や情報を得ることを重視する。また、大学生活を通じて資格取得を促進させる目的で、ビジネス能力検定試験の対策講座を教養ゼミ内で実施した。また、レポート作成の演習により、基礎的なライティングスキルの向上を図った。

■ 成 果

令和4年度経済学科で実施した教養ゼミの代表的な成果は、以下のとおりである。

- ・ビジネス能力検定試験では3級と2級合わせて116名となった。経済学科学生の他の取得資格と比較するとビジネス能力検定の合格件数は圧倒的に多く、初年次学生のビジネス知識の習得や資格取得への意識向上につながっている。
- ・令和3年度に引き続き、クラス担任別の対面授業回にグループワークを行い、最終的には、プレゼン発表を行うという授業を実施した。グループ内でリーダーを中心に協議や作業分担を行い、プレゼン発表をさせるという新入生にはやや難易度の高い内容であったが、アクティブラーニングとしての学習効果も高いと感じられた。

■ 課 題

- ・昨年度に引き続き、16 クラスを同一時限に実施しているため、対面授業における授業教室の確保が困難となった。このため、一部クラスではグループワークやプレゼン発表に適さない教室を割り当てざるを得ない状況であった。
- ・新型コロナ感染対策のため、遠隔授業を併用せざるを得ない状況であったが、主年次のゼミという本科目の位置づけとしては、対面授業が大半となることが望ましい。令和5年度からは、受講生全体で実施する授業回においても対面で実施しているため、コロナ禍で数年続いた遠隔実施は令和5年度からは大幅に削減できている。

経済学部 国際経済学科

■ 担当者氏名

(代表)ビセット・イアン・ジェームス、白 映旻、佐野 穂先

■ ゼミの学生数

26 名（うち留学生 4 名）

■ 実施内容

学生用ツール:学内の IT システムの使い方及び、伝染病流行や天災時の交通遮断等に起因する対面講義中断の場合を想定した遠隔講義の受講方法

学生用ツール:電子メールの使い方及び正しいメールの書き方

学生用ツール:大学での勉強方法(図書館の利用方法など)

学生用ツール:プレゼンテーションの方法と、英語と日本語のプレゼンテーション資料の作成方法。特に留意したのは、オンライン翻訳ツールで得た未学習の単語をそのまま使うのではなく、一旦それらを生徒が既に学習済みの英語に置き換えて自ら理解可能な資料を作成するよう促した。

学生用ツール:小論文の書き方、Microsoft word を使った正しい出典の引用方法

学生用ツール:Microsoft excel の簡単な分析モデル

ビジネス能力検定試験対策

■ 教養ゼミの成果等

「英語 I」または「英語 II」が不合格の学生は、将来の学業上の問題を示唆する兆候であることを認識し、年間を通してこの 2 つの科目における学生の成績を注意深くモニターした。その結果、2 人の学生が「英語 I」が不合格であったがカウンセリングと励ましの後「英語 I(再)」と「英語 II」に合格した。「英語 II」の不合格者はいなかった。

■ 問題点、改善点及び対応策

近年オンライン翻訳ツールの登場により、生徒が簡単に英語で文章を作成できるようになった。加えて ChatGPT の登場により教育方法に細かな配慮が必要になりつつある。このため今後は学生の個々の貢献、アイデア、努力なしには完成させることができないような課題をデザインする試みを続けていく予定である。

経済学部 税務会計学科

■ 担当者氏名

(代表)堀田彩、小林正和、許霽、大城朝子

■ ゼミ数, ゼミの学生数

38名

■ 教養ゼミの特徴

- ・ 授業の実施とともに、4人の担任や教務委員による学生へのきめ細かい指導とサポートを行う点

■ 授業のねらい

学生の学力・能力の向上のための基盤を、以下により構築する。

- ・ 教員間ならびに学生間の交流を深め、大学とのつながりを作る。
- ・ 安全に安心して学校生活を送れるようにサポートする。
- ・ 大学における学修への動機付けを高める。
- ・ 資格取得にチャレンジし、各自が自信を持てるようにする。
- ・ 卒業後の進路など、自身のキャリアについて考える機会を提供する。

■ 実施内容

- ・ 大学における学修方法の指導(履修指導、講義の受け方、セレッソの使い方など)
- ・ 大学生活やキャリアに関する質問への回答
- ・ 図書館ならびに図書館ホームページの利用方法の紹介(データベースへのアクセス方法など)
- ・ 税務会計学科の紹介(教員、授業、コースなど)
- ・ 自己紹介やグループディスカッションによる学生間の交流促進
- ・ 大学生活で起こりがちなトラブルに関する注意喚起(詐欺や宗教の勧誘などの被害防止)
- ・ 学生生活上の困りごととその解決について考えるグループワークとプレゼンテーションの実施
- ・ コミュニケーション・スキルの向上のための訓練(傾聴とディスカッションの実践)
- ・ ビジネス能力検定対策講座の実施
- ・ 教養講座受講のアナウンスと出席報告
- ・ 個人面談の実施(前後期2回実施)

■ 成果

- ・ 学生の不安や困っていることに対応できた。
- ・ 著しい単位取得不足、成績不良に陥る者への対応ができた(休学、退学する学生に対しては、担当教員による話し合いがもたれ、学生や保護者の納得や理解が得られた)。
- ・ ビジネス能力検定を積極的に受検し、複数の学生は2, 3級同時合格を果たした。

■ 課題

- ・ 大学への適応状況や成績が中位層の学生に対するフォローが少なく、その必要性について検討する必要があると考えられる。つまり、上位者はイベントへの参加や自らの申し出によりフォローする機会が確保される。下位者は、成績不良者への指導や欠席指導などの機会がある。しかし、中位の学生へのフォローは、個人面談のみとなる。まずは、中位層の全体的な学習意欲や成績の変動を把握する必要があるだろう。

人間文化学部 人間文化学科

■ 担当者氏名

(代表) 村上 亮

■ ゼミ数, ゼミの学生数

全1年次生52名

■ 授業のねらい

- (1) 1年生が教員全員と顔を合わせるとともに、各教員の研究に触れる。
- (2) 学生全員がお互いに交流を深める。
- (3) 大学における学修への動機付けを高める。
- (4) 卒業時の到達目標を明確に意識することで、自分に自信を持つ。

■ 学修の到達目標

大学生として必要なコミュニケーション能力の基礎となる力を身につける。

*コミュニケーション能力の基礎となる力：聴く力、話題に参加する力、質問する力、自分の言葉で自らの考えを表現する、プレゼンテーションする力など。

■ 実施内容

- (1) 1年生を3班に分け、学科教員がオムニバスの授業を行った。
但し、第2、3回は2班に分けて実施、また第1、4、11、15回は全員で実施した。
- (2) 各教員の講義に先立ち、事前学習用の資料をセレッソを通じて配布した。また講義中には、配布資料をふまえた発言を求める機会を設けた。さらに、期末レポートの執筆のため、また受講者の思考をより深めるための参考文献も提示した。
- (3) 各教員のテーマは下記の通りである。
 - ・小原：「ジョン・デューイを追いかけて」
 - ・古内：「建築で見る日本古代史」
 - ・村上：「マリー・アントワネットをめぐる言説」
 - ・青木：「文学の役割」
 - ・重迫：「韻数文解：詩の言葉を分析する」
 - ・脇：「言葉をつなげる、言葉でつながる」
 - ・原：「ドイツ文化への誘い」
 - ・清水：「祈りの行動学」
 - ・柳川：「昔の「普通」を考える」
- (4) 講義計画

第1回 (4/14)	ガイダンスと研究倫理教育
第2回 (4/21)	図書館／保健管理センターのガイダンス、
第3回 (4/28)	図書館／保健管理センターのガイダンス
第4回 (5/12)	資料検索、レポートの書き方に関するレクチャー (村上)
第5回 (5/19)	オムニバス講義① (小原、古内、村上)
第6回 (5/26)	オムニバス講義① (小原、古内、村上)

第7回 (6/2)	オムニバス講義① (小原、古内、村上)
第8回 (6/9)	オムニバス講義② (青木、重迫、脇)
第9回 (6/16)	オムニバス講義② (青木、重迫、脇)
第10回 (6/23)	オムニバス講義② (青木、重迫、脇)
第11回 (6/30)	学期末を迎えるにあたっての注意点：レポート、定期試験対策 (村上)
第12回 (7/7)	オムニバス講義③ (原、清水、柳川)
第13回 (7/14)	オムニバス講義③ (原、清水、柳川)
第14回 (7/21)	オムニバス講義③ (原、清水、柳川)
第15回 (7/28)	学期のまとめ (全員)

(5) 評価

各講義に関するコメントシートの提出に加え、期末レポートを課した。課題は、「授業全体を通じて関心を抱いた、あるいは考えたことをまとめる。その際、授業中に紹介された文献、あるいは自分で調査した参考文献を用いること」とした。

■ 教養ゼミの成果

セレッソに提出された学生からのコメント、期末レポートの内容から提出した学生については全員が到達目標に達した。採点については、学科教員が分担し、最終的には学科会議において教員全員で確認した。とくに、教養ゼミの枠内にとどまらず、その他の講義の内容とも結びつけて考察を深めた学生が複数いたことは大きな成果と考える。

■ 問題点、改善点、対応策

2020年以來、新型コロナ禍のためにオンラインが中心になってきたが、本年度はすべてのプログラムを対面で実施することができた。そのため学生と教員との間でコミュニケーションをとれたことは成果である。また1年生に教員の研究の一端を紹介できたことも重要だった反面、学生の取り組みに大きな差異が認められたことは否定できない。さらにいえば、欠席が目立つ学生、自主的に取り組む姿勢に欠ける学生へのフォローは次年度も課題であることを申し添えておきたい。

■ 担当者氏名

福留 広大, 金平 希, 枝廣 和憲

■ ゼミ数, ゼミ

の学生数

ゼミ数3, 各ゼミに16名もしくは17名の1年生が所属した。

■ 実施内容

<前期>

- ピア・サポート訓練 (教員+SA)
自己紹介ゲーム, エゴグラム (性格検査) の実施, 他者への印象, 傾聴
- レポート作成を学ぶ (教員)
レポートの書き方に関して講義。レポートとは何か, レポートを作成する際の注意点, アカデミックライティングのコツ, “コピペ” の禁止, メールの書き方, について解説した。また, 履修生はこの講義に関する要約型レポートを提出した。
- 新入生歓迎会 (2年生主催)
2年生が主体となってドッジボールを体育館にて実施。
- 保健管理センター学生相談の案内

<後期>

- スタディスキル (教員+SA)
文章要約の方法, 論文の構成・読み方, 論文の要約
- ビブリオバトル
グループで図書を一冊用意し, それについて, スライドを用いて発表した。
- 保健所によるゲートキーパー講座

■ 教養ゼミの成果

【授業全般】

前期は, ピア・サポート訓練, レポートの作成方法, 学生相談に関するガイダンス, 新入生歓迎会が主な内容であった。ピア・サポート訓練では, 「ピア・サポートをはじめよう」をテキストに, 学生同士がサポートしあうためのスキルの訓練を行なった。レポートの作成方法については, 2022年度担当教員3名が協議を重ねて講義資料を作成した。レポートが作文や小論文とどのように異なるのか, どのように書けば説得的に書くことができるのかについて, アカデミックライティングの技法を解説した。また, コピペがなぜ許容されないのか, 適切な引用を行うための知識を解説し, 研究倫理に関する知識も深めた。履修生はこの講義について「要約型レポート」を作成した。

後期は, スタディスキル, ビブリオバトルが主な内容であった。スタディスキルでは, 文章の要約方法, 論文の読み方から要約方法について, 本学科教員が執筆した論文を題材として学習を行った (山崎他 (2005) 大学生へのピア・サポート訓練による自尊感情や自己開示, 社会的スキルへの効果の検討)。また, ビブリオバトルでは, グループディスカッションや発表等の活動を通して, グループでの役割, 課題を見つけるところから発表までのプロセスを経験した。

【SAからのサポート】

ピア・サポート訓練, スタディスキル, ビブリオバトルでは, 各ゼミ1名のSAを利用し, 活動の補助が行われた。上級生がSAとして授業に参加することで, 1年生のピア・サポート訓練の効果が上がり, グループワークがスムーズに進むなど, 学年を越えた交流が促進された。

■ 今後の課題

欠席回数が多い学生への対応を考えていく。レポート作成に必要なアカデミックライティングのスキルについて、もう少し深く前期中に取り上げる。

■ 特記事項

心理学科教員が作成した冊子（ピア・サポート訓練のテキスト）を1年生に配付した。

新入生合宿オリエンテーションは中止となった。他方、新入生オリエンテーションでは、学生サポーターが中心となり、時間割指導および体育館でのレクリエーションを企画・実施し、新入生同士のコミュニケーションを促進し、仲間同士で支えあう風土を築くための活動を積極的に実施した。

人間文化学部 メディア・映像学科

■ 担当者氏名

(代表)：渡辺浩司

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数：3 (一年次担任：筒本、渡辺、丸山)

ゼミの学生数：10 名程度

■ 前期実施内容

- 履修登録など教務関係のガイダンス
- Zoom や Zelkova、Cerezo、Office365 等、ICT 環境のガイダンス (遠隔講義への対応含)
- 少人数ゼミ (大学での学びについて、ゼミ学生の交流、SNS の活用について、等)
- 就職に関するガイダンス、「私のトリセツ」を作成したりするなど、将来設計を考えるための準備作業の方途を伝えた
- チームビルディングを通じた、クラス内交流

■ 後期実施内容

- 教養講座への参加を基本とし、受講についての連絡や情報共有をしつつ、個別に面談を実施し、受講態度や課題への取り組み方などを指導した

■ 前期教養ゼミの成果

受講者の将来の夢や目標を実現するために本学科で何を学ぶかを明確にする、学科に関係する職業と学科の教育目標の関係が説明できるようになるという点はおおよそ達成できた。

少人数ゼミと全体ゼミをバランスよく実施し、学生と教員との交流や学生間での交流の機会を設けることで、孤独感や孤立感を緩和し、共に学修する仲間がいることを意識させるようにしたことで、文献購読や資料調査など、一つ一つの課題に取り組む力が身についたように思われる。

■ 問題点, 改善点

横だけでなく縦のつながりを1年次からどのように作っていくかが課題になっている。このため、2022年度の交流プログラムでは、一部を2年生との協働とすることで、学年の枠を超えた活動を開始する試みを行なっている。

工学部 スマートシステム学科

■ 担当者氏名

代表: 伍賀 正典

宮内 克之、仲嶋 一、歌谷 昌弘、田中 聡、香川 直己、関田 隆一、菅原 聡、沖 俊任、伍賀 正典

■ 実施内容

- 1 回目(4/18) 自己紹介
- 2 回目(4/25) 授業の受け方、ノートの取り方(1)
- 3 回目(5/2) 数学習熟度試験
- 4 回目(5/7) 授業の受け方、ノートの取り方(2)
- 5 回目(5/9) 図書館ガイダンス
- 6 回目(5/16) これまでの教養ゼミの協働ワークの紹介
- 7~9 回目(5/23、5/30、6/6) 小グループゼミ
- 8~15 回目(6/13、6/20、6/27、7/4、7/11、7/18、7/25、8/1) グループワーク

■ 教養ゼミの成果等

- 初回では授業のオリエンテーションと、各自の自己紹介を行った。
- 2, 4回目では、基礎的なスキルとしてのノートの取り方や授業の受け方について指導した。
- 3回目では数学の習熟度をみるための試験を実施した。
- 5回目では附属図書館に移動し、図書館ガイダンスを受講した。
- 6回目では6月後半以降に実施する協働ワークの説明を行った。
- 7~9回目では、初回で実施した数学テストの結果から小グループに分けた。この小グループでゼミを行い数学基礎などの学力底上げを行った。
- 8~15回目まで、グループワークとしてテーマごとに分かれて協働作業を行った。各班のテーマは、レスコンシーズのイベント実施、電子デバイス製作のプロジェクトである。ブレインストーミングや線表を用いたスケジュール、グループでの協調作業を経験した。
- グループワークのレスコンシーズ班、電子デバイス製作班ともに、成果物を三蔵祭で展示することができた。また、これらの班から有志を募り、この実施内容を11月に広島工業大学で開催された、第31回計測自動制御学会中国支部学術講演会で口頭発表を行った。

■ 問題点, 改善策, 後期での対応策

- ここ数年、教養ゼミのグループワークを出発点とし、学会発表や学外イベントなども実施している。今回のグループワークにおいても、学園祭での展示、地方学会での発表で成果を出すことができた。
- グループでの作業は学生間の交流を深める狙いがあるが、今回の1年生は留学生が多く、日本人学生と留学生でチームに分かれて作業が行われた。初年次教育に於いて、留学生数の多寡によってオリエンテーションの対策を考慮していかなければならないと感じた。
- 今回の教養ゼミは、後半のグループワークはほぼ対面に戻り学生間の共同作業が実施された。このグループワークでは、意欲的な学生とそうではない学生間に差があったが、対面作業の効果でほとんどの学生が意欲的に取り組み、大学祭の展示も皆積極的であった。大学の初年次教育の科目という点を鑑みると、学生の興味を惹き、意欲的に取り組んでもらえる課題を提示していくことは望ましい方針であり、今後も深化させていくべきと考える。

工学部 建築学科

■ 担当者氏名

(代表・1年担任) 田辺和康、伊澤康一、酒井要
大島秀明、都祭弘幸、梅國章、佐藤圭一、藤原美樹、佐々木伸子、山本一貴

■ 教養ゼミの目的

建築の初学者に対する入門授業として、「建築」で取り扱うジャンルがデザイン・計画・歴史・環境・構造・構法といった文系から理系にわたる広範な分野を扱うことを知ることを目的としている。

自分が建築学科での学びにおいて、どのジャンルについて取組んでいきたいかを決めていくための第一歩として、各教員の専門性を活かした内容の少人数ゼミナール形式によるグループワークによって、「建築」が取組むジャンルや内容についての理解を深め、建築に対する興味の掘り起こしのキッカケづくりとしていく。

■ 実施内容

授業は、建築への興味と理解を深めていくために、7～8名の学生を全教員がゼミ形式で分担して担当し、第2回～14回までを各ゼミ単位でのグループワークをPBL (Problem-based learning: 課題解決型学習) 形式で進め、学生自らが課題を探すことから取り組みを始めた。

各ゼミ単位での取り組みにおいて、次の3項目を共通事項としている。

- 1) 対象フィールドは、松永を中心とした備後地域(松永・福山・尾道)を対象にする
- 2) 設定した「共通テーマ」を基に、各研究室で取組む具体的なリサーチ課題を設定する
- 3) 具体的に取組む内容は、各研究室の専門性・特長を生かした視点・内容で設定する

R4年度も、「地域の課題を解決する」を共通テーマとし、各ゼミで内容を決めて取り組んだ。

第1回は、全員を製図室に集めてガイダンスと配属ゼミ発表を実施した。

第2回～第14回は、各ゼミ単位でグループワークを実施した。

第15回は、感染症対策のため、3つの製図室すべてを使用して、成果発表会・講評を実施した。

※発表ゼミは製図室1で発表、次発表ゼミは製図室1で静かに待機、発表時以外は製図室2・3で他ゼミ発表を聴講という形式で行なった。

※発表5分+質疑応答3分=計8分(1研究室あたり)

■ 教養ゼミの成果

7～8名のグループワーク形式で課題に取り組んだことにより、少人数体制だから可能となる濃密な意見交換・討論や共同で実施する資料リサーチや発表資料作りなどの学修活動を展開することができた。

■ 課題

成績評価方法として、今回は、教員10名による各ゼミ発表の評価(50点満点)と、ゼミ担任による各ゼミ生の取り組み評価(50点満点)を合計した点数(100点満点)で評価した。各ゼミの取り組み内容を学生間で相互評価することは実施しなかった。

今後は、学生間の相互評価を評価指標に組み込むことを検討して良いかもしれない。そのことによって、学生ならではの評価軸が加わるとともに、学生の意識向上が図れると考えられる。

■ 担当者氏名

(代表)中道上

山之上卓、尾関孝史、金子邦彦、新谷敏朗、宮崎光二、池岡宏、森田翔太

■ 目的

1年次生に対し、少人数クラスを編成し、初年次教育の一環として、コミュニケーション、ディスカッション、プレゼンテーションなどの能力を伸ばす。あわせて、大学での学び、情報工学科での学びについて詳細を説明し、学生自らが大学でのより良い学びができるよう情報提供と指導を実施する。また、学生は、教養講座を受講し、幅広い学問的視野と教養を身に付ける。

■ 実施内容

実施回数 15 回のうち、7 回は、1) 単位、時間割、履修方法の確認、2) 受講の心得(勉強の仕方)、3) 履修登録確認、4) 学生相談室、図書館の利用法、5) 大学生活について(課外活動や大学祭など)、6) 資格取得、7) マナーアップ作戦として工学部新棟付近の清掃活動 7) 学科の特別講演会も実施した。残りのうち 2 回はプレゼンテーションワークを行い、5 回は教養講座を割り当てた。プレゼンテーションワークでは、テーマとして「All about me?」として学生自身の自己紹介プレゼンテーションを通して、創造性、自主性、論理的思考に関する実習を実施した。具体的には、

第 1 週 「見やすいプレゼンテーション資料」を視聴、「All about me?」として自己紹介プレゼンテーション資料を作成

第 2 週 「All about me?」として自己紹介プレゼンテーションを実施

を行った。プレゼンテーションワークでは、教養ゼミの趣旨を考慮し、

- ・学生同士のコミュニケーションの機会を多くとり、お互いの理解を深める
- ・学生と教員が接する機会を多くとり、学生と教員の距離を縮める
- ・コミュニケーション、ディスカッション、論理的思考、プレゼンテーション資料作成、スピーチを到達目的とした。

教養ゼミの他の活動として、学科の特別講演会や、学科の大学祭への参加があった。

■ 成果等

教養ゼミを通して、大学生活や大学施設の利用方法を学んだ。また、「All about me?」プレゼンテーションを行うことによって、学生同士のコミュニケーションが活発になり、お互いをより深く理解できるようになった。多くの教員と話をする機会を多くとることにより、担任以外の教員とも気軽に話せる雰囲気を作ることができた。また、プレゼンテーション資料の作成方法の実習、スピーチの実習を通して、基礎的なプレゼンテーションスキルを修得させることができた。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

木村純壮, 内田博志, 真鍋圭司, 坂口勝次, 加藤昌彦, 中東 潤, 関根康史, 小林正明, 金谷健太郎

■ ゼミの学生数

クラス全体 22 名, 個別ゼミ 2-3 名 (クラス全体と少人数の個別ゼミを組み合わせ実施)

■ 実施内容

- 第 1 回 個別ゼミ(遠隔授業)
 - 第 2 回 個別ゼミ(遠隔授業)
 - 第 3 回 個別ゼミ(対面授業)
 - 第 4 回 個別ゼミ(対面授業)
 - 第 5 回 基礎教養ゼミ(1)大学とは—大学で何を学ぶか(内田・中東, 対面授業)
 - 第 6 回 基礎教養ゼミ(2)大学とは—大学生としての自覚と責任(内田・中東, 対面授業)
 - 第 7 回 基礎教養ゼミ(3)企画力とチームワーク1—大学祭イベントの企画書を作ろう(中東・内田,対面授業)
 - 第 8 回 基礎教養ゼミ(4)企画力とチームワーク2—大学祭イベントの計画書を作ろう(中東・内田,対面授業)
 - 第 9 回 (対面授業)
 - 第 10 回 (対面授業)
 - 第 11 回 (対面授業)
 - 第 12 回 (対面授業)
 - 第 13 回 (対面授業)
 - 第 14 回 (対面授業)
- } 個別ゼミ
- 第 15 回 特別講義「企業での開発・設計」:ダイキョーニシカワ(株) 杉山義孝 講師 (遠隔授業)
 - 第 16 回 教養講座(1)「エネルギーの将来:2050 年カーボンニュートラルの世界とその課題」(中山 寿美枝師)(遠隔授業)
 - 第 17 回 教養講座(2)「南極クラス」(井熊 英治師)(遠隔授業)
 - 第 18 回 教養講座(3)「創傷(ケガ)の処置方法」(林田 健志講師)(遠隔授業)
 - 第 19 回 教養講座(4)「わくわくする人生の創り方」(野宮 俊江講師)(遠隔授業)
 - 第 20 回 教養講座(5)「一人ひとりの Well-being を高めるために」(宍戸 仙介講師)(遠隔授業)
 - 第 21 回 企業見学会 (中止)

■ 教養ゼミの成果等

○木村ゼミ

初年次教育として, 大学生活への適応や注意点, 基礎力の育成と大学生活の目標, 将来計画等をテーマとして取り扱った. 第 5 回から第 8 回までは, 機械システム工学科 1 年生クラス全体によるアクティブラーニングを行った. テーマは, 「大学とは」, 「チームによる大学祭イベント企画書の作成」. 毎回の授業において, 説明・問題提起, 考察, 整理, プレゼンテーション, 質疑のプロセスを経るようして, 学生が自分で考えること, プレゼンテーションやディスカッションの機会が増えることを重視している. しかしながら, 新型コロナウイルス感染症の影響が継続し, ディスカッションは控えめにした. 課題, レポート中においては, 例年同様可能な限り自ら考える機会を保つようとした.

○内田ゼミ

第 3, 4 回では, 大学新入生としての心構えや基本知識を学習し, 第 9, 10 回の図書館オリエンテーションとキャンパスツアーを通じて, 福山大学の全体像を把握した. 第 5 回~第 8 回は, 学科共通の基礎教養ゼミとし

て、大学生としての目的意識、企画・計画力等について学習した。第 1、2、11 回は、「映画から人生を学ぶ」として、大学生生活や若者の進路に関する映画を鑑賞して、感想を述べあった。第 12 回～第 14 回は「折り紙ロボットを作る」として、大学における研究の一端を学ぶとともに、制御系 CAE ソフトである Matlab の入門的内容を学習した。第 15 回の特別講義と 3 回の福山大学教養講座を通じて、社会全体に対する視野を広げた。

○真鍋ゼミ

今年はコロナ禍のなか、最初数回が遠隔授業であった。大学生活を始めるための基本的なことや注意点は遠隔授業および対面授業で説明できた。5回から8回目までの基礎教養ゼミは1年生全員で、内田、中東先生の担当により遠隔で全員で話し合いや討論を行った。7月からは個別ゼミに戻り、数学を題材にして、パソコンを持参し、パソコンでの数式入力やグラフ作成を行った。プレゼンテーションは十分には行えなかった。

○坂口ゼミ

「SDGs (ゴール 7) エネルギーをみんなに そしてクリーンに」を統一テーマとし、学生が個々に設定した各テーマは、地熱発電、次世代自動車であった。現在のエネルギー事情や地球環境の現状と危機を踏まえ、これら個々のテーマの原理・仕組みや問題点と解決策について情報収集・分析・整理した結果をまとめ、発表した。これらの学修によって、持続可能な循環型社会をめざして技術者として社会に貢献する態度を醸成する意味でも、本学科での学修の意義を確認する機会になったと思われる。

また、大学での学修に関する技能・態度、基礎教養ゼミを通じて大学での学び等の態度を身に付ける取組み、企業人(技術者)による産業界でのモノづくりの現状と技術者の仕事と心構えを知るための「特別講義」を開催した。これらの取組みが、これからの学修生活をどのように送るかを具体的に考える良い機会になったと思われる。

○加藤ゼミ

第 1～4 回で、教養ゼミの意義、大学での勉強方法、生活態度、就職のための準備等について説明し、今後の勉学・生活面で進むべき方向を理解させた。第 5～9 回では、基礎教養ゼミとして大学教育の意味、創造性を醸成させた。第 10～14 回では、機械工学専門科目の一つである材料力学のイントロ講義として、ケント紙を使ったコンテスト競技型授業を行った。

○中東ゼミ

このゼミでは、最後にこの授業を通じて学んだことや感想についてのレポートを提出してもらっている。受講生の主な感想等は以下の通りである。

- ・人との接し方やサークルやアルバイト、資格のことまでいろいろと学べた。
- ・大学生が騙される危険の中で、詐欺の種類の多さが印象に残った。
- ・大学生としての心持ち、姿勢、これからの大学生活での意識すべきことについて学べた。

コロナ禍につき企業見学会は中止となったが、学生個々で感じたことや得るものがあつたと考えられる。

○関根ゼミ

授業内容については、技術者倫理に関することや、最近社会的に問題とされている高齢ドライバーの事故、以前に倉敷市消防局から依頼のあつた衝突事故を起こした大型トラック(運転室改造車)の乗員救出法のイメージトレーニングに関する内容等をテーマにした。

○小林ゼミ

本年度の前半は遠隔授業での実施となった。前半は、大学での勉強方法や学生生活、就職活動などについても説明を行った。SGD 形式で実施したことにより学生同士のコミュニケーションをとることができより深く理解ができたものと思われる。後半は、対面形式での実施となった。簡単なモノづくり教材を用いてモノづくりの大切さ、レポートの作成方法、プレゼンテーションの方法などを学習した。受講生は教養ゼミの時間だけでなく講義の空き時間などを使って各テーマに取り組んでいた。モノづくりに挑戦することで創造する楽しさや達成感を得ることができたと思われる。

○金谷ゼミ

本授業では、専門学習に必要なコンピュータの基礎や表計算ソフトを用いたデータ処理、コンピュータネットワークの基礎、ワープロを用いた文書作成、ビジュアル表現法、発表技術等を学んだ。また、レポートやプレゼン

テーションの指導も行った。このゼミを通して、以下の能力が学修できたと考えられる。

1. ネットワークリテラシーを理解し、E-mail や検索エンジンを活用できる。
2. ワードプロソフトを活用して、報告書等を作成できる。
3. 表計算ソフトを活用して、合計や平均などの計算および結果から適切なグラフの作成ができる。
4. プレゼンテーションソフトを活用して、スライドの作成ならびに発表をすることができる。

■ 問題点、改善点、次年度までの対応策

○木村ゼミ

新型コロナウイルス感染症の拡大防止を考慮したため、ディスカッション等は思い通りに実施できなかった。授業後のアンケート結果により、授業内容に関する意義は理解されていると思われる。

○内田ゼミ

次年度は開講しない。

○真鍋ゼミ

例年、学生同士のコミュニケーションは、無口な学生も近年多く、十分ではなかったと感じる。しかし数学の基礎については問題を多く解き、パソコンでグラフなど書くことで興味が引き出せたと思われる。

○坂口ゼミ

自発的かつ楽しみながらテーマの設定や情報収集・分析・整理に取り組めることができていると思われる。学生同士のコミュニケーションも一層図っていきたい。

○加藤ゼミ

オンラインと併用で実施した。第 10～14 回はアクティブ型授業としており、BYOD パソコンを活用した。学生の学習意欲が高い授業とすることができた。

○関根ゼミ

次年度は開講しない。

○中東ゼミ

上述のように学生自身はそれなりに学んでくれたものと考えている。引き続き学生にとって有意義な教養ゼミを行っていくことと、企業見学会が再開できるのであれば学生には出席して欲しいと思う。

○小林ゼミ

前半の遠隔授業は、学生間でのコミュニケーションをとるためZoom形式で実施した。Zoomでのコミュニケーションの取り方などの課題が残った。後半の対面形式での実施では、モノづくり教材を用いてモノづくりを実施した。積極的に取り組んでいる学生とそうでない学生との取り組み方が異なっていた。学生が制作した作品を用いてコンテスト形式にすることによって授業に対するモチベーションを上げることができた。

○金谷ゼミ

第 1、2 回は遠隔授業であったが、対面授業のほうがよいという意見があった。また、内容が「情報処理基礎」に似ているとの意見もあった。ただし、これは必ずしも悪い意見ではなく、復習できて良いとの意見であった。初めて教養ゼミを担当したので、授業が計画通りに進まないところがあった。授業の難易度が高く、教える量や課題が多かったため、次年度は改善してゆきたい。学生が欠席したり、毎回の課題を提出しなかったりしたことがあったので、ゼミの問題なのかもしれないが、第1、2希望で本ゼミを選んだ割には学習意欲が本当にあったのかどうか疑わしい。また、教養講座のレポートを白紙で提出されたこともあった。次年度からはレポートの内容を提出直後に確認したい。

生命工学部 生物工学科

■ 担当者氏名

(代表) 松崎浩明

山本覚、久富泰資、岩本博行、佐藤淳

■ 生物工学科教育プログラムにおける教養ゼミの位置付け

生物工学科では、学習意欲を高め、目標を設定し達成することを目的として、演習科目や実験科目を教育プログラムに多く取り入れている。本学科カリキュラムにおいて教養ゼミは、本学・本学科の教育の特徴の理解を深めさせ、一般教養を高めながらさらに幅広く事象に対する興味を喚起する科目として位置付けて開設している。さらに、初年次教育として、受講生が高校から大学の学修・生活へスムーズに移行し、またセミナーや実体験を通して受講生同士及び受講生と教員間で密にコミュニケーションを取ることで教員や友人との信頼関係を構築し、協調性や自主性を育成することを目指す。コミュニケーション力を育成するためにプレゼンテーションやディスカッションなどを積極的に取り入れて実施している。

■ 実施内容

<前期>

- 第1回 教養ゼミガイダンスおよびオリエンテーションの補足
大学における履修と学修 -「大学での履修」や「生徒と学生の違い」を考える-
- 第2回 第1回教養講座 中山 寿美枝先生 「エネルギーの将来：2050年カーボンニュートラルの世界とその課題」
- 第3回 学生生活について -どのような学生生活を送るかを考える、自己管理術、年間目標の作成-
- 第4回 大学での学習に向けて -学修スキル（講義の聴き方、ノートの取り方）を学ぶ-
- 第5回 大学での学習に向けて -書物、新聞、インターネット、および学術雑誌による情報収集を学ぶ-
- 第6回 大学での学習に向けて -学修スキル（リーディング）を学ぶ-
- 第7回 バイオの歴史 -古典的バイオについて知る-
- 第8回 バイオの歴史 -現代バイオについて知る-
- 第9回 バイオの歴史 -ニューバイオについて知る- 遺伝子組換え食品の安全性について考える
- 第10回 生物工学科における研究 -大学ホームページ、研究室訪問による研究の調査-
- 第11回 生物工学科における研究 -研究紹介の発表原稿の作成-
- 第12回 大学祭学科展示の企画 -過去の展示企画の紹介、過去の展示企画に対する意見・感想-
- 第13回 大学祭学科展示の企画 -展示企画を考える-
- 第14回 第2回教養講座 猪熊 英治先生 「南極クラス」
- 第15回 前期の学修・生活を振り返って -前期の総括を行い、後期にどのようにするか考える-

<後期>

- 第16回 第3回教養講座 林田 健志先生 「創傷（ケガ）の処置方法」
- 第17回 夏休みの出来事のまとめ、大学祭の準備 -大学祭の展示物の作成-
- 第18回 第4回教養講座 野宮 俊江先生 「助産師が伝える【わくわくする人生の創り方】」
- 第19回 大学祭の準備 -大学祭の展示物の作成-
- 第20回 大学祭での展示発表
- 第21回 大学祭の総括 -大学祭展示発表の成果、来年度課題のグループディスカッション、発表-
- 第22回 学修スキル -実験ノートの作成法を学ぶ-
- 第23回 学修スキル -実験データの整理法を学ぶ-

- 第24回 学修スキル -実験レポートの作成法を学ぶ-
- 第25回 第5回教養講座 宋戸 仙助先生 「一人ひとりのWell-beingを高めるために」
- 第26回 最近のトピックス -最近のトピックスの情報を収集し、内容とコメントをまとめる-
植物の栽培 -福山大学ワインプロジェクト概説-
- 第27回 キャリア設計 -卒業後の進路の可能性について知る、挨拶、マナー、礼儀を知る-
- 第28回 キャリア設計 -資格取得やインターンシップについて知る-
- 第29回 2年次の学修に向けて -将来の夢を達成するための学修計画を立てる-
- 第30回 1年次の学修・生活の総括 -学修・生活を総括し、どのような教養を身に付けたか考える-

■ 成果について

- (1) 教員が受講生と緊密なコミュニケーションを図りながら、「大学での履修」、「生徒と学生の違い」、「学修スキル」の解説、大学における学生生活の指導を行うことで、受講生が高校から大学の学修・生活にスムーズに移行でき、また学修意欲を高めることができた。
- (2) 年間目標を設定することで充実した生活を送れ、目標を達成することで自己を成長させることができた学生がある程度いると思われる。新型コロナウイルス感染症の流行のため、充実した生活や目標達成が困難であった学生もいた。
- (3) 古典的バイオと現代バイオを紹介する講義の受講や生物工学科における研究の調査によって、生物工学に対する興味が増し、学修意欲が向上した。また、最近のトピックスの情報を新聞、テレビ、インターネットのホームページなどから収集する方法と情報の整理方法を学んだ。実際に情報を収集して、内容を要約し、トピックスに対する自身の意見を述べ、幅広い教養を身に付けるためのスキルを修得できたと思われる。最近のトピックスについては何回か課題を提出することで効果があったと思われる。
- (4) 講義の聴き方、ノートの取り方、リーディング、実験ノート作成、実験データ整理、レポート作成を指導することで、学修スキルとこれらを行う習慣を身に付けることができた。
- (5) 大学祭の学科展示の企画、準備、展示発表によって協調性、自主性、コミュニケーション力、プレゼンテーション力が向上した。また、教員、友人、先輩との信頼関係を構築できた。
- (6) 挨拶、マナー、礼儀を幾らか醸成することができた。
- (7) 卒業後の進路や将来の夢について考え、これらの実現に向けて、キャリア設計を検討し、2年次の学修計画を立てた。

■ 次年度への課題

- (1) 大学祭の準備で他の学年との連携がスムーズに行えず、準備が効率良く行えなかった。他の学年と合同で準備を行える機会を設け、準備を効率良く行い、協調性、自主性、コミュニケーション力などの育成効果を高めたい。
- (2) アクティブラーニングとして、大学祭の展示発表を実施した。展示発表では、来客者が訪れても、積極的に展示の紹介・説明をできなかった学生が幾らかいた。次年度はさらに積極的に行動するように指導したい。

生命工学部 生命栄養科学科

■ 担当者氏名

(代表) 石井香代子
田中信一郎、井ノ内直良、菊田安至、西 彰子、吉田純子、村上泰子、山田直子、中崎千尋

■ ゼミ数, ゼミの学生数

学生数:27 ゼミの学生:5~6名 (前期:クラス全体と少人数制ゼミを組合わせて実施)

■ 前期実施内容

- 第1回:オリエンテーション/学科カリキュラム、学生生活指導・学科のルール(1年担任;井ノ内、菊田)
- 第2回:大学施設を知る/教務課、学生課、未来創造館の訪問(担任;井ノ内、菊田)
- 第3回:第1回教養講座(オンデマンド)/カーボンニュートラルなど:講師 中山寿美枝氏
- 第4回:大学施設を知る/図書館利用・文献検索の仕方、保健管理センター(1年担任;井ノ内、菊田)
- 第5回:学修スキルの修得1/大学ノートの取り方、まとめ方(西)
- 第6回:学修スキルの修得2/読解力を身につける(村上)
- 第7回:学修スキルの修得3/自分の考えを整理する力を身につける(西)
- 第8回:第2回教養講座(オンデマンド)/傷の回復と対処法:講師 林田健志氏(医師)
- 第9回:社会人マナーの醸成/状況に応じた対応力を身につける(石井、山田)
- 第10回:大学祭とともに/①実施テーマの検討、大学祭と管理栄養士の業務(菊田、井ノ内、山田)
- 第11回:第3回教養講座(オンデマンド)/南極越冬経験と地球の未来:講師 ミサワホーム社員
- 第12回:生命倫理①/管理栄養士に必要な事(田中、菊田)

■ 後期実施内容

- 第13回:生命倫理②/ヒトの生と死(田中)
 - 第14回:第4回教養講座(オンデマンド)/看護、若者の心のケア 講師;野宮俊江氏
 - 第15回:生命倫理③/医療・福祉における倫理的判断(田中)
 - 第16回:大学祭とともに/②役割分担、準備活動(1年担任、副担任)
 - 第17回:大学祭とともに/③計画案により、クラスメイト・教員との協働(1年担任、副担任)
 - 第18回:大学祭とともに/④クラスメイト・教員との協働(1年担任、副担任)
 - 第19回:大学祭とともに/⑤クラスメイトとの協働、外来者との交流(1年担任、副担任)
 - 第20回:大学祭とともに/⑥クラスメイトとの協働、外来者との交流(1年担任、副担任)
 - 第21回:大学祭とともに/⑦大学祭を振り返る(1年担任、副担任)
 - 第22回:管理栄養士の基礎知識講座/栄養計算の方法① 成分表の理解(吉田)
 - 第23回:第5回教養講座(オンデマンド)/教育・自己肯定感の先にあるもの:講師 央戸仙助氏
 - 第24回:管理栄養士の仕事を知る/①学生の調べ学習:病院・福祉(村上、石井)
 - 第25回:管理栄養士の基礎知識講座/栄養計算の方法②(吉田)
 - 第26回:管理栄養士の仕事を知る/②学生の調べ学習と外部講師との交流:病院・福祉(村上、石井)
 - 第27回:研究活動を知る・卒業研究発表会の聴講、研究の面白さを覗いてみよう!(全教員)
 - 第28回:管理栄養士の仕事を知る/③学生の調べ学習・小学校、行政(西・山田)
 - 第29回:管理栄養士の仕事を知る/④学生の調べ学習と外部講師との交流:学校・行政(西・山田)
 - 第30回:臨地実習を知る(オンデマンド)/臨地実習発表会の聴講(全教員)
- ※今年度の教養講座は、オンデマンドでの実施となった

■ 教養ゼミの成果

令和 4(2022)年は、コロナウイルス感染症対応を緩和した授業体制となった。学科での教養ゼミ実施では対面を中心に行った。全学での開催の教養講座はセレッソを活用した「オンデマンド」授業の実施となった。

前期において、大学生活への導入など対面で進めながら、授業の受け方やノートの取り方など、大学生活における学修の基本事項を指導した。また、管理栄養士の立場における倫理観の基礎知識を学び、プロフェッショナルとしての意識付けを提起した。

後期は、大学祭をコミュニケーション能力向上の機会と捉え、また目的に据え、実施案の計画段階から学生同士の検討を教員が助言・補助しながら進めた。大学祭が 3 年ぶりの対面実施なり、会場設営、情報発信の素材を作成し展示した。大学祭当日の運営も学生が分担し、来学者との交流を行った。学科の紹介・楽しく学ぶ栄養学を学生考案で表現した。また、管理栄養士教育の初年次教育を充実させる目的で、専門職として現場で活躍する卒業生を招き、管理栄養士業務の解説と現場での実践について、学生と交流しながら解説した。その授業に際しては、事前学修として学生の管理栄養士業務等の調べ学修を実施して、予め情報収集して臨んだ。卒業研究発表会、臨地実習発表会など高学年の発表への参加は、オンデマンドの動画等の情報を視聴する形式にして、学修の継続を維持した。

■ 問題点、改善点、次年度に向けた課題

新型コロナ感染症の感染状況と国の対応を勘案して、授業形態が対面中心に変更となった。大学での遠隔授業の導入・実施に慣れてきて、情報発信の方法も教員・学生間で上手くやり取りができる経験値が上がった。新入生にとって新生活は不安も大きいと考えるが、対面でのコミュニケーションなどで問題解決を図ることができた。

将来の職業選択や管理栄養士業務の早期からの理解を視野に、管理栄養士の専門職としての意識付けも重要である。そのため、専門家の業務を知り、体験する目的で、各専門現場で活躍する卒業生を招き、在学生(後輩)に管理栄養士業務の解説と交流を実施した。学修の目的・必要性なども併せて説明し、学修するモチベーションの維持を目指した。

課題として、学力向上と共に学力不足の学生に対する担任からの支援を充実させる。担任との面談など直接的なコミュニケーションの機会を回数も考慮して学生の不安感や問題点の把握に努めることが重要である。障害のある学生支援について、年間を通して学科教員・担任の適切な対応を検討・実践していく事が課題となった。

生命工学部 海洋生物科学科

■ 担当者氏名

(代表) 三輪泰彦

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数: 16

ゼミの学生数: 6-7名

全学生数: 104名

■ 前期実施内容

- 1) 全体ガイダンス: 教養ゼミの内容説明、履修、授業(セレッソの小テスト、レポートの提出対応など)、試験、学習支援等の補足説明、セキリティーソフトのインストール対応、研究者(学生)求められる研究倫理の講習
- 2) 自己紹介
- 3) 個人面談-学生生活、欠席調査など
- 4) 図書館の利用法によるガイダンス
- 5) 大学祭の展示企画-1 テーマおよび展示の原案作成-グループディスカッション
- 6) 大学祭の展示企画-2 テーマおよび展示の原案作成-グループディスカッション
- 7) 大学祭の展示企画-3 テーマの決定-全員でディスカッション
- 8) 大学祭の展示企画-4 大学祭の物品リストの作成- テーマごとにディスカッション
- 9) 前期定期試験への心構え

■ 後期実施内容

- 1) 大学祭の計画-工程表の作成
- 2) 大学祭の準備-1 ポスター、看板、展示物の作成、準備作業の役割分担等
- 3) 大学祭の準備-2 水槽のセットアップ、金魚の飼育、展示する海洋ジオラマの制作、プラ板の作成等
- 4) 大学祭の準備-3 会場の設営、展示物の備え付け、大学祭当日の役割分担およびスケジュールの調整等
- 5) 大学祭- 来場者への対応
- 6) 大学祭- あとかたづけ
- 7) 個人面談-欠席調査など
- 8) 大学祭の反省会
- 9) 後期定期試験への心構え

■ 教養ゼミの成果等

- 1) 本学の活動指針に基づき、前期から1学年104名を大講義室に集めての対面授業を実施することができた。新型コロナウイルス感染症の感染対策をとりながら、スモールグループディスカッションによる少人数体制で行ったので学生と教員、学生同士でコミュニケーションを十分にとることができた。
- 2) 学生生活や教務(履修方法、欠席調査、ゼルコバやセレッソなどICTサービスによる操作方法、定期試験への対応など)の情報を学生に周知させ、サポートすることができた。

- 3) 学祭展示企画のテーマを決定するために各グループで提案された企画案について全体討議を行うが、平成 27 年度からは、その司会進行を学生に任せている。今年度も引き続き学生が立候補して 3 名が司会進行役を務めてくれた。
- 4) プロダクトとして大学祭の展示企画（3つのテーマ、展示内容、必要物品等）についてまとめることができた。テーマ：1) 海洋ジオラマの展示・2) 海洋生物をモチーフとしたプラ板ぬりえ・3) 金魚すくい（定番）。
- 5) 大学祭を通じて学生同士の団結力（仲間意識や絆）を高めることができ、イベントに参加したことでやりがいを感じてもらった。大学祭を通じて友人をつくることができた。一方、同級生に指示する際にはリーダーシップやコミュニケーション力の大切さを学ぶための良い機会を与えることができた。
- 6) 大学祭の来場者（小中学生や高齢者、親子連れなど）への対応を通して、教員や学生以外の人とコミュニケーションをとる経験ができた。たとえば、知識を全くもたない人（たとえば金魚の飼い方など）に興味を持って理解してもらうためには、何をどのようにして伝えたらよいか、実践することでコミュニケーションを取ることの難しさや、コミュニケーション力を身につける必要性を学ぶことができた。
- 7) 大学祭の水槽などのかたづけ作業では男子も女子も、率先して行ってくれたので責任感をもたせることができた。
- 8) 学生 1 人 1 人に、自分が担当した展示企画の問題点、反省点、今後の改善点、学科展示に参加した感想などをそれぞれ、まとめてもらった。

■ 問題点、改善点、対応策

- 1) 令和 4 年度は令和元年度以来の「大学祭の学科の展示・企画」について、各グループで提案された企画案について、1 学年(104 名)を介してプレゼンテーションや全体討議を行うことができた。令和 5 年度も学科全体で新型コロナウイルスの感染防止対策と学生の健康管理を徹底して行い、従来のキャンパスライフに戻していきたい。
- 2) 今年度も昨年度と同様に積極的にテーマごとにリーダー、副リーダー、書記に立候補し、その運営に指導力を発揮してもらった。今年度も、しっかりとリーダーシップを発揮する学生が見られた。しかしながら全体で 3 テーマあることから 1 テーマあたりの学生数が 30~35 名と非常に多いので学生リーダー、副リーダーだけでは展示企画の仕事を進めていくのが非常に難しいと感じた。今年度も 1 テーマあたり、3 グループに分けて役割分担を決め、グループごとのリーダー、副リーダー、書記を中心にして運営を進め、テーマのリーダーが各グループを統括するようにした。
- 3) 大学祭は基本的に全員参加であるが、一部の学生は執行部の三蔵委員や各サークルに所属しており、大学祭の期間は執行部やサークル活動の仕事にそれぞれ専念してもらった。その際、担任にその旨、報告・連絡させた。一方でテーマごとに一部の学生の負担（準備や当日の展示運営）が大きいことも問題となった。
- 4) 大学祭やスモールグループディスカッションにおいて学生が主体となって取り組むことができる環境づくり（目標をしっかりと理解してもらう、学生の意見や考えを発表しやすい雰囲気をつくること、積極性を引き出す手法を考えることなど）を継続して行っていく。
- 5) 昨年度と同様に、学生からのアンケート調査を行い、展示企画の問題点、反省点、今後の改善点を次年度の教養ゼミにフィードバックしていく。
- 6) 教養ゼミの時間割調整が難しい。本学科では学生実験や会議、出張等によって一部の教員はスケジュール合わせができないことがある。また、因島キャンパス専任の教員は、因島キャンパスから本学に移動するため、「Zoom」などの ICT サービスを積極的に活用して個人面談や遠隔授業を取り入れて、きめ細やかな学生生活のサポートを行っていきたい。

薬学部

■ 担当者氏名

(代表) 山下純

(担当) 井上裕文、前田頼伸、高根 浩、猿橋裕子、広瀬雅一(薬学入門担当)

今 重之、西山卓志、渡邊正知、上敷領淳、小川祥二郎、前原昭次(クラス担任)

■ ゼミ数, ゼミの学生数

新入生 103 名に対し、薬学入門 I ならびに教養講座において教養ゼミを実施した。

■ 実施内容

1 薬学入門 I (担当責任者: 山下純)

今年度は全ての授業を対面で実施した。外部講師による授業は、4月27日と6月27日に行った(肌色と黄色の背景)。学年を3つのクラスに、クラスをさらに3つのグループに分けて、グループ単位でスモールグループディスカッション(SGD)を行い、薬学入門担当教員(1名)ならびにクラス担任(1名)がチューターとしてクラスごとに指導を行った(青色背景)。6月15日、20日、22日は、クラスごとに調剤室において調剤体験を行った(緑色背景)。 ※日程・授業概要は別紙参照

2 教養講座(担当責任者: 山下純)

第1回教養講座【オンデマンド方式】

令和4年4月26日(火)から5月9日(月)まで

講師: 中山 寿美枝(J-POWER:電源開発株式会社 執行役員/京都大学経営管理大学院 特命教授)

演題: エネルギーの将来: 2050年カーボンニュートラルの世界とその課題

第2回教養講座【オンデマンド方式】

令和4年7月15日(金)から7月24日(日)まで

講師: 井熊 英治(株)ミサワホーム総合研究所 南極研究プロジェクト所属)

演題: 南極クラス

第3回教養講座【オンデマンド方式】

令和4年9月16日(金)から9月25日(日)まで

講師: 林田 健志(島根大学医学部附属病院形成外科 診療科長、准教授)

演題: 創傷(ケガ)の処置方法

第4回教養講座【オンデマンド方式】

令和4年9月27日(火)から10月11日(火)まで

講師: 野宮 俊江(Smile ~わくわく保健室~ 開業助産師)

演題: 助産師が伝える【わくわくする人生の創り方】

第5回教養講座【オンデマンド方式】

令和4年12月2日(金)から12月21日(水)まで

講師: 宍戸 仙助(認定NPO法人 シーエスアールスクエア 理事長)

演題: 一人ひとりのWell-beingを高めるために

■ 教養ゼミの成果等

学生が主体となって能動的に学習・情報共有、さらに体験することによって『気づきの学習』を実践することで、学生の行動変容のためのきっかけ作りになる。上記の学習により、次の事項について向上ならびに醸成を得たと考える。

- ・学生-教員間ならびに学生同士のコミュニケーションの活性化
- ・薬学生としてのモチベーションの醸成
- ・情報の収集と処理ならびにプレゼンテーションなどの能力の向上

- ・能動学習のための動機づけ
- ・問題解決能力の向上
- ・挨拶、マナー等の社会性の涵養

■ 問題点, 改善策等

- ・学生のアンケート調査によって、改善を行っている。

2022年度「薬学入門Ⅰ」

日程	4月13日(水)	18日(月)	20日(水)	25日(月)	27日(水)	5月2日(月)	7日(土)	9日(月)	11日(水)	16日(月)	18日(水)	23日(月)	25日(水)	30日(月)
教室	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	予備日	抗体検査 (五郎丸先生より別途 連絡があります)	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	予備日	予備日	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	予備日	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	予備日	予備日	予備日	予備日
3限	P1、P2、P3	P1、P2、P3			菅奈奈美 P1、P2、P3			P1、P2、P3		P1、P2、P3				
4限	P1、P2、P3	P1、P2、P3			菅奈奈美 P1、P2、P3			P1、P2、P3		P1、P2、P3				
5限		P1、P2、P3						P1、P2、P3		P1、P2、P3				
授業 内容	「今心にあること (希望、期待、不 安)」についてSGD (KJ法)	「人にやさしい薬・ 良い薬(薬の種類や 分類)」について SGD(KJ法)			【ヒューマニズム・ コミュニケーション】 行動変容のための 役立ち感と幸せに ついて気づきの学習 をする			「薬剤師の仕事の種 類」についてSGD (マインドマップ)		「病院・保険調剤薬 局の薬剤師の仕事」 についてSGD(イ メージマップ)				

日程	6月1日(水)	6日(月)	8日(水)	13日(月)	15日(水)	20日(月)	22日(水)	27日(月)	29日(水)	7月4日(月)	6日(水)	11日(月)	13日(水)	20日(水)	25日(月)	27日(水)
教室	予備日	中間試験期間		34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	34号館4階 総合演習室 調剤実習室2	34号館4階 総合演習室 調剤実習室2	34号館4階 総合演習室 調剤実習室2	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	34号館2階 研修室1&2 プレレセッション室1&2	34号館2階 研修室1&2	34号館2階 研修室1&2	予備日	予備日	予備日	予備日
3限				P1、P2、P3	P1	P2	P3	山中智香 P1、P2、P3	P1、P2、P3	P1、P2、P3	P1、P2、P3	P1、P2、P3				
4限				P1、P2、P3	P1	P2	P3	山中智香 P1、P2、P3	P1、P2、P3	P1、P2、P3						
5限																
授業 内容				【事前学習】 調剤体験前のSGD	調剤体験(P1)	調剤体験(P2)	調剤体験(P3)	【マナー・コミュニ ケーション・薬剤師 について】薬学生と しての心得や理想の 薬剤師について学ぶ	【振り返り】 調剤体験後のSGD	【事前学習】 1. 見学でのマナーならび に注意点を討議する。 2. 見学への質問内容につ いて討議する。	薬剤師に質問してみ よう(病院)	薬剤師に質問してみ よう(薬局)				

大学教育センター